

マドリッド日本人学校における理科指導の工夫とキャリア教育の実践

前マドリッド日本人学校 教諭

北海道江別市立中央中学校 教諭 関 川 元 樹

キーワード 在外教育施設、マドリッド、理科教育、キャリア教育

赴任校の概要 (2025年3月現在)

マドリッド日本人学校

Collegio Japones de Madrid

URL : <http://www.cjmsspain.com/>

1 はじめに

本稿は、スペイン・マドリッド日本人学校における3年間の勤務を通じて教科指導の工夫とキャリア教育の実践を記録としてまとめたものである。異文化に身を置きながら教育に携わる中で、日本の教育の良さを再確認するとともに、スペインや欧州の教育から学ぶべきエッセンスを多く発見することができた。ここでは、現地の特色ある教育環境を活かし、子どもたちの「可能性を引き出す」ことに焦点を当てた実践を報告する。

2 教育実践と教科指導の工夫

(1) 地域資源を活かした理科授業の展開

スペインの自然環境を教材として活用し、マドリッドに多く見られる植物「アルメンドロ（アーモンド）」や「オリーブ」の観察授業を行った。アルメンドロはサクラと同じバラ科であり、花のつくりや果実を日本の植物と比較しながら観察することで、分類学的視点を深めた。また、校内に生育する植物を用いて実際に果実を分解し、観察・スケッチ・考察を通じて「理科は身の回りとつながっている」という実感を得られるよう工夫した。



校内のアルメンドロ



校内のオリーブ

(2) 量子力学と中学理科を関連付けた探究授業

中学2・3年生を対象に、「原子・分子の構造」と「量子力学」と「人の生き方」を結びつけた探究授業を実施した。授業では、量子の世界における「観測によって状態が決まる」という不確定性や、選択が現実を生むという考えを題材に、人間の生き方にに関する問い合わせかけた。

特に以下のような実験とワークを取り入れた点が特徴的である。

- ・「ワイングラスと同じ周波数の声で振動させる実験」

ワイングラスを叩いて音を鳴らした後、同じ振動数の声をワイングラスに当ててもらった。ワイングラスにストローを入れており、ストローが振動したことによりワイングラスが振動したことを確認することができた。

- ・「高い周波数で生きるとは?」

ワクワク、感謝、ねぎらい、誠実さなど、高い周波数の感情状態にあると、良い出来事が引き寄せられるという概念を紹介し、自分の感情の周波数を意識して生活するよう促した。

- ・「自分が心からワクワクすることは何か?」

生徒にとっての「ワクワク」を探求するワークを通して、自分の感情に正直になる力、自らの進路や生き方を考える力を養った。

- ・「感謝の記録を書く」活動

毎日の生活の中で感謝できることを見つけて書き出し、ポジティブな気づきを共有する時間を設けた。

このような探究は、理科の知識にとどまらず、生徒自身の価値観や人生観にまで問い合わせかけることができた。生徒からは「理科が生き方とつながっていることに驚いた」「感謝の気持ちを意識すると、毎日が変わる気がした」といった声が寄せられた。

3 キャリア教育の推進

中学部主任として、進路指導の一環としてのキャリア教育にも力を注いだ。地域とのつながりを活かし、多様な職業人を招き、体験型の講演会を実施した。

(1) 多職種によるキャリア講演会の実施

以下のような講師陣を招聘し、生徒の視野を広げる取り組みを行った。

- ・マドリッド在住の整体師（中井経嘉氏）

実際に指圧の仕方を教えて頂き、友達同士で体験しながら、身体と心のつながり、健康の大切さとともに、夢の実現のために必要な考え方や心持ちについて語っていただいた。

- ・マドリッド在住のサッカーコーチ（伴瀬大輔氏）

実際にサッカーを指導して頂き、練習の中で、何事も夢中で打ち込むこと、失敗を恐れずに挑戦する姿勢、試行錯誤できる思考能力の大切さについて、伝えていただいた。

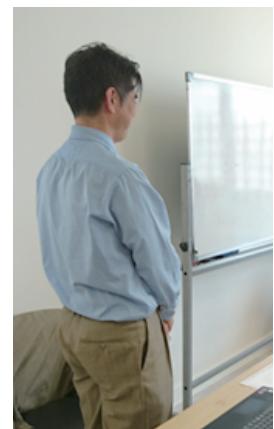
- ・マドリッド在住の肺外科医（久保友次郎氏）

実際に手術で使う糸で、傷をつけた鶏肉を縫う作業を行った。また、生命と医療の現場について、リアルな視点で話していただいた。

- ・オランダ在住のテニスコーチ（小西真由美氏）

実践を通して、テニスの楽しさに触れ、テニスの素晴らしさと同時に日本との考え方の違いについて、伝えていただいた。

生徒たちは、普段なかなか接することのない職業人の話を聞き、自分の将来や働くことの意義について考える機会を得た。



整体師の中井さん

(2) 進路指導と多文化環境への対応 —マドリッド日本人学校における進路支援の実践—

- ・現地インターナショナルスクールと日本の通信制高校への進学

- ・帰国生入試制度のない難関公立高校への合格

いずれも情報が少なく、前例がない中で、生徒と保護者との信頼関係を土台に、「どうすれば実現できるか」

と一緒に考え続けた。「進路には正解が1つではない」ことを生徒・保護者と共有し、個のニーズに応じたきめ細かな指導を心がけた。常識にとらわれない柔軟な発想と、挑戦を励まし続ける姿勢が成果につながった。

4 おわりに

この3年間の海外派遣は、教育者としてだけでなく、人間としても大きな成長をもたらしてくれた。異文化に身を置き、学び続ける子どもたちの姿に触れることで、日本の教育に必要な視野の広さや、柔軟な発想の重要性を痛感した。私は今後、日本においてもこうした海外での実践や学びを還元し「どこで学ぶかではなく、どう学び、どう生きるか」を共に考える教育を展開していきたい。世界で学び続ける子どもたちと同じように、教育者自身もまた、学び続ける存在でありたいと願っている。